

学思

85

2026年1月～3月

「学びて思わざれば則ち罔く、思いて学ばざれば則ち殆し。」——『論語・為政篇』

目次

- センター長のコラム..... 2
- 活動報告..... 3
 - ・ 第11回日本人研究者ネットワークさろん
 - ・ 2025年度希平会第2回連絡会
 - ・ 第17回HOPEミーティング
- 編集後記..... 5
- 活動記録 (2026年1月～3月)..... 5



JSPS BEIJING
OFFICE

科研費がやってきた——学振の転機を振り返る

以前にもこのコラムで書きましたが、私が日本学術振興会（学振／JSPS）で働き始めたのは、学振が財団法人から特殊法人に移行して20周年を迎えた1987年のことでした。当時の学振は、予算規模約53億円、正規職員数は50人に満たず、契約職員を含めても全員の顔と名前をすべて覚えられるほどコンパクトな組織でした。その後、政府の「ポストク1万人支援計画」による若手研究者向け事業の拡充や、政府出資金を活用した「未来開拓学術研究推進事業」の創設などを通じて、学振の予算規模は右肩上がりですべて伸びていきました。

こうした歩みにおいて、学振が名実ともに「ファンディング・エージェンシー」としての地位を確立する決定的な転機となったのが、1999年の「科研費」の移管です。この年、文部省（現文部科学省）から科学研究費補助金（科研費）の業務が学振に移され、学振の扱う予算規模は一気に205.7%増の1,305億円へと跳ね上がりました。数字の上から見ても、学振の歴史における大きな転換点だったと言えるでしょう。いよいよ科研費が学振に来るといふ時、ある部署の課長がつぶやいた言葉が今でも記憶に残っています：「手術で頭を取り替えたなら、それは同じ人間と言えるのか……」

科研費の移管は、当時の文部省学術審議会や総合科学技術会議がまとめた「競争的資金制度改革」に関する報告や提言に沿った施策でした。ただ、その背景にはもう一つ、別の政策的な意図があったのではないかと、私は思っています。間近に迫る文部省と科学技術庁の統合を見据え、科学技術政策の枠組みに収まりきれない、研究者の自主的かつ多様な学術研究を守り、振興していくためのゆるぎない拠点として学振を形作っておこう——そんな考えが、当時の政策担当者の間にあったのではないのでしょうか。

それから四半世紀以上が過ぎました。現在、学振の予算規模は3,000億円に達し、そのうちおよそ8割を科研費関連事業が占めています。「学振＝科研費の配分機関」というイメージが、すっかり定着したと言ってよいでしょう。職員数も300名近くにまで膨れ上がり、私が働き始めた頃とはすっかり様相を異にするようになってきました。科研費移管当初、科研費担当部署は外部からの出向職員で構成されており、多くの一般職員にとって科研費は「どこかよそ事」のように感じられていたかもしれません。しかし今では、学振に新卒で入職した職員が管理職として科研費事業を采配するまでになっています。科研費業務は、名実ともに学振の組織文化の中に深く根付いているといえます。1932年に財団法人として設立されて以来、学振は「我が国の学術振興を担う中核的機関」であることを自負してきました。科研費がやって来たことで、学振はその役割を大きく変えたのかもしれませんが。しかし同時に、それによって学振は、学振としてぶれることなく存続し続ける道を手に入れた——私はそんなふうにも思っています。

第11回在中国日本人研究者ネットワークさろんを開催

2026年1月16日（金）、中国国内の大学その他の公的研究機関で研究に従事している日本人研究者を中心とした「在中国日本人研究者ネットワーク」の会合である「在中国日本人研究者ネットワークさろん」を北京脳科学・脳型知能研究所（CIBR）にて開催しました。今回は、CIBRの大前彰吾主任研究員と大村優共同研究責任者がコーディネーターを務め、中国各地で研究・教育・科学技術関連業務に従事する13名が参加しました。CIBRは2018年に設立された新しい研究開発機関であり、所属している他の日本人研究者らも最近赴任されたばかりです。

大前先生からは「脳とAI」を、大村先生からは「セロトニンと情動」

をテーマに、中国で研究するに至った経緯や意義を交えて講話がありました。大前先生と大村先生は、日本と中国に加えてアメリカでの研究経験もお持ちであることから、日中米の研究体制の違いについても触れていただきました。中国での環境は、研究費や人件費が比較的潤沢なため日本では購入できなかった研究機器を購入できたといった良い面がある



さろんの様子

一方で、研究室の立ち上げがなかなか進まないといった悩みもあったようです。最後に研究室見学のセッションでは最新の設備を見学する機会もありました。

JSPS北京研究連絡センターでは、今後も、日本人研究者のキャリアや中国での研究に資する、有意義な交流の機会と情報提供を行ってまいります。



集合写真

2025年度希平会第2回連絡会を開催

2026年1月30日（金）に中国に事務所や拠点を持つ日本の大学等機関を中心とした「希平会」の2025年度第2回連絡会を開催しました。今回は、対面で14機関20名、オンラインで21機関32名にご参加いただきました。

まず、佐藤会長による開会挨拶では、こういう時だからこそ周恩来総理が唱えた「民を以て官を促す」を思い出し、共に頑張りましょうとの励ましの言葉がありました。続いて在中国日本国大使館の桑迫一等書記官から着任挨拶があり、久留米大学北京教育交流中心の王橋氏からは4月から「久留米大学中国校友会」として活動する旨報告がありました。次に事務局からの報告にて、事前のメール審議において立命館アジア太平洋大学からの正会員参加の申し出

に対して決議・了承されたことが伝えられました。2026年1月末日現在、希平会は正会員42機関、オブザーバー14機関が所属しています。

講演のセッションでは、李廷江主任（清華大学日本研究センター）から「日中関係の歴史を振り返り、日本の大学は今どうするか」をテーマに講演いただきました。その後、参加大学同士で現在の交流状況を報告し合い、中国に事務所を有さない大学にも現場の現状を共有し、再び交流ができる時に備えて既存のプログラムを再検討する等今何ができるかを意見交換しました。

最後に佐藤会長から、引き続き希平会の場で互いの大学が課題と問題点を共有し新しい解決方法を見出していきたいとの決意が述べられました。川上副会長からは、日中のために尽

力している人がこれだけいることを確認し合っ、これからも活動をしていきたいとの言葉がありました。



会議の様子



対面参加者の集合写真

第17回HOPEミーティング

2026年3月2日から3月6日にかけて、日本のつくば市にて第17回HOPEミーティングが開催されました。HOPEミーティングは、アジア・太平洋・アフリカ地域から選抜された若手研究者が、ノーベル賞受賞者をはじめとする著名研究者や同年代の仲間たちと交流する「知の合宿」です。今回は、アジア・太平洋・アフリカの20か国・地域から選抜された102名の優秀な博士課程学生・若手研究者が参加しました。中国からは、NSFCの推薦により9名の研究者が参加しています。

会期中、6名のノーベル賞受賞者の講演やグループディスカッション、チームプレゼンテーションを通じて、文化的な背景も専門分野も異なる若手研究者たちが5日間、熱い議論と対話を繰り返しました。



1. 自身の研究を発表する張宇航博士（北京大学）（張博士はベストポスター賞を受賞しました。）
2. ポスターセッションにて、梶田隆章教授（2015年ノーベル物理学賞）と記念撮影する王赫博士（中国科学院大学）
3. 北川進教授（2025年ノーベル化学賞）を囲んでのグループディスカッション
4. レセプションに招待された中国大使館の苗允参事官と山口センター長を囲む中国からの参加者
5. チームプレゼンテーション
6. 日本文化体験（茶道）
7. エクスカーション（浅草）
8. 集合写真

編集後記

1月の北京は最低-12℃前後の日が続き、池や川の水が凍り天然のアイススケートリンクになっています。一方で今年の春入りは3月19日で4月に入ると柳絮の綿毛がくるくと舞っています。北京の冬と春の風物詩です。私たち北京センターは変わらず日中交流に向き合い続け、たとえ春の訪れが無くとも進み続けます！……いやいや、いくら何でも春が無いのは厳しい。というわけで、まずは凍え切った体を涮羊肉で温めて英気を養いました。熱々のゴマだれに浸した羊肉を一口頬張れば、凍りかけていた心もじんわり解けていく——まさに、これぞ日中の架け橋！

副センター長 今城佳奈子



紫竹院でアイスバイク



北京名物羊肉のしゃぶしゃぶ
「涮羊肉」



春餅を食べて春を感じる



老北京料理の
炸醬面、麻豆腐、三不沾

活動記録

(2026年1月～3月)

1月

- 7日 在中国日本国大使館主催新年賀詞交換会出席
- 8日 日中経済協会北京事務所訪問
- 13日 科学技術懇談会出席
- 14日 希平会交流会出席
- 15日 北京日本倶楽部文化講演会出席
- 16日 在中国日本国大使館一行来訪、第11回在中国日本人研究者ネットワークさろん開催
- 19日 野村不動産一行来訪
- 27日 BRIDGE 事業中国審査会

- 28日 広報文化十一者会出席
- 29日 日本商會会合出席
- 30日 北京日本倶楽部・国際協力機構 (JICA) 共催セミナー出席、希平会連絡会開催

2月

- 11日 韓中科学技術協力センター、韓国研究財団 (NRF)、科学技術振興機構 (JST) との意見交換会出席
- 25日 広報文化十一者会出席

- 27日 在中国日本国大使館主催天皇誕生日祝賀レセプション出席

3月

- 2日 第17回 HOPE ミーティング出席
- 5日 日本商會会合出席
- 20日 一橋大学訪中団来訪
- 25日 広報文化十一者会出席、島根大学・寧夏大学国際共同研究所一行来訪
- 26日 日本商會会合出席
- 27日 北京日本倶楽部文化講演会出席

日本学術振興会 北京研究連絡センター
JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE BEIJING OFFICE

北京市朝陽区東三環北路5号 北京發展大廈1021室

Tel: +86-10-8882-4331 E-mail: beijing@jsps.org.cn URL: www.jsps.org.cn



WeChat